

かゝり引き連れて、其側に持つて行く、目隠しは、見ないで、手で觸つたり撫でたりして見て、其誰だかを當てるのです、當てられた人は、すぐ代つて目隠しになり、當てなければ、後へ〜と違つた人を連れて行くのです。

(十一) 英雄の籤抽き

紙の籤を、遊びの人數だけ拵らへて、其籤の端に十とか二十とか二十五とかの數を書き入れて置いて、さて、各自夫を抽き當てたときに、自分の引き當てた數と全じだけの、昔の英雄の名を言ふのです、始めに籤を抽いた順で以て、言ふことにして前に言つて仕舞つた英雄の名を、次に言ふ人は二度と言つては行かない事になる。

これは、英雄の名でなくても、或は動物の名とか植物の名とかにしても宜しいのです。

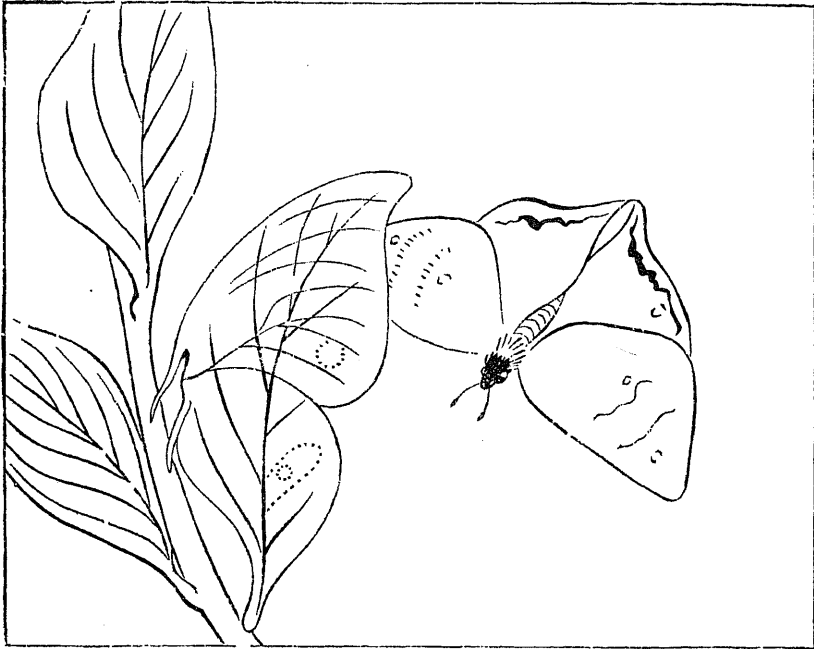
奇妙な動植物 (ついで)

田村寛二

第一回のお話の時に申しました、ベントウコワシがなぜあんな姿勢で樹枝にとまるかと申しますとあれは強い動物に見付けられて食はれない様に木の枝の眞似をして居るので、動物の擬態であると申しましたが、茲にも其体の彩色と相待つて巧に其擬態をして居る、極面白い例がありますから二つ三つ挙げて見ませう。

(九) 木葉蝶

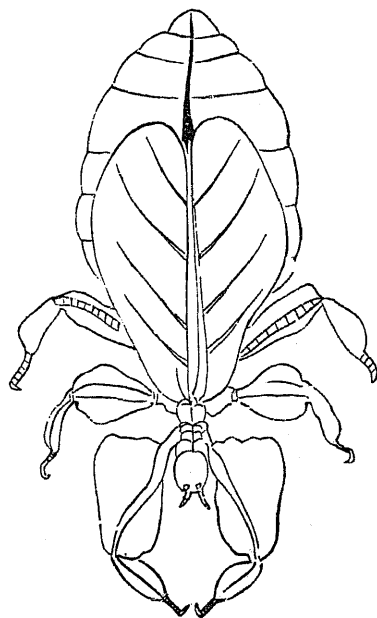
我國の琉球地方やマレイ群島や印度地方に棲んで居る一種の蝶があります。木の葉の蝶と申しまして、圖によつて御覽の通り、其の表面は極美麗な彩色を有して居りますが、其裏面は丁度枯れ葉の様であります。此蝶が止まるときには其翅を



閉ぢて枯れ葉の様な所を出し、而も枯葉のある木  
 に止まるのが常であります。斯ふ云へば皆さんは  
 そんなら枯葉のある木が無かつたら。此蝶は休ま  
 ずにいつも飛び廻つて居るのか、殊に印度地方の  
 様な暑い國では其樹木は常に鬱蒼として茂り、日  
 本の様に紅葉する樹なんかは見られないではない  
 か、それにどうして蝶がそう甘く枯れ葉のある木  
 ばかりに止まるとか、出来るものか、とお詰りなさ  
 るでせう、然し常緑樹であるからと云つて一度出  
 た葉が其樹が枯死するまで、青々としてゐる譯の  
 ものでない、松などは常緑であるが其代りに古  
 い葉から漸次に枯れて行くから、何時も枯れ葉が  
 幹に近い方に付いて居ます。

此蝶が止まりますと急度後翅の後端にある短い  
 突起を樹の枝に當て、圖の様な位置をとります

から、此處が丁度葉の葉柄の様に見えます。おま  
 けに此點からして黒い線が兩翅の中央を通つて  
 まして前肢の端に終つてをります。恰も葉の中肋  
 (主脈)の様なものでそれか  
 らまた小肋(支脈)の様に枝  
 が出てゐます、頭や觸覺器  
 などは兩翅の間へ隠しまし  
 て、少しも外からは見えま  
 せぬ、唯足を出して一寸躡  
 驅を支へてゐる計りです、  
 だから一見枯葉と異つたと  
 はありませぬ。翅の色など  
 も赤褐色や薄黄で隈取の様  
 ですから、色合も枯葉  
 と變りませぬ。其うへ翅には所々に小さな黒い點  
 がありませぬ、これは枯葉に生ずる黴菌に擬した



るものであります。こんな有様ですから一度此蝶  
 が枯葉の間に隠れますと、とても見出す事は出来  
 ませぬ。

はありませぬか、皆さん此理由は、お考へなすつ  
 て御覽。

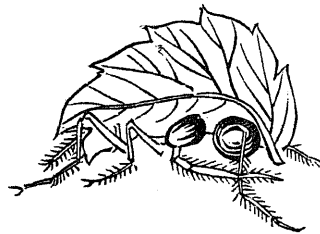
(二) 木葉虫

此項の初めに當つ  
 て申しました通り、  
 此蝶の表面はまこと  
 に美麗で目につき易  
 いですが、それはど  
 んな理由があるので  
 せうか、裏面と同じ  
 様な色をしてゐたら  
 一層發見され難いで

木葉虫は蝗虫の一種でありまして、全身は青々としてゐて一寸見た所では緑葉の様でありませぬ、まづ右圖で御覽なさい背にゐる翅は少しも木の葉と變らない様な形をしてゐるでせう。其翅の主肋小肋のあり具合、此等の間を網羅してゐる細脈の散布し具合など、確かに葉の形をわらはしてゐるです。其他六本の歩足も一々葉片の様な形をしてゐるです。勿論これは前の木葉蝶の様に此圖で見たと所では余りよく似ては居りませぬが緑葉として彩色の具合と云ふものは、中々うまく出来てゐて全く木の葉としか見なせぬ。

(一一) 木葉蟻

此も擬態を説明するには、極よい適例でありませぬ。



して、上圖に示してある通り木葉を荷ふてゐる蟻でありませぬ、一寸見ると上部即ち背の處は木の葉ばかりしか見えませぬから、何が見たつて其本体

の處はみえませぬ、だからどんな強いものが來ても單に木の葉とのみ思つて、敢て近付きませぬ。これが此蟻にとりての城ともなり楯ともなる所のもののでありまして、擬態も斯うまで巧みになつて來ますと、實に吾々も其精巧にあきれるより外はありませぬ。

以上述べました二三の例からして皆々これ等は等動物が如何に苦心して、此激烈なる生存競争の行はれてゐる世の中に立つて、優者の地位を得ようとしてゐるかと思ふことがわかりになつたでせう。斯様に著しい擬態の方法

を持つて居ない他の動物だつて、此生存競争の間に處して行くのには皆相當の心配をして、色々自分の身を全うしようと勉めるものであります。

(未完)

そろもんのちえ

むかし〜ユデアといふ國のソロモンと申した王様は、大層、智慧のあつた方だ相で、そのおはなしが、澤山、書物の中に残つて居ります。

(その一)

ある日のこと、ソロモン王の所へエジプトの國から、女王がお見えになりました。

此女王は、かね〜ソロモンの智慧の勝れて居るといふ評判を聞きまして、どうかなして、「一番凹せてやりたいと思つたのでせう、先づ、恭々しく、

大王の御機嫌をうかいつた後、まことに見事な二枝の花を出しまして、「これは、一方は眞の花で、一方は造り花でございますが、大王には、どれがどれだか、お手に取らないで、お分りになる御工夫がございますか」と申し上げました。勿論、其造り花といふのは、大變上手に出来て居るので、から、手に取らないでは、とても分る工風はありませなんだ。すると大王は、徐かに、左右の者に命じて、周圍の窓を開けさせました、所が折しも粉蝶が二三匹飛び込んで来て、眞の花に留りましたから、夫で、譯もなく言ひ當てました。